

報告

対話型国際遠隔授業の成果と課題について ——青島理工大学と徳島大学との遠隔ネット交流の実例から——

張晶¹⁾・劉潔¹⁾・大橋 眞²⁾

1) 青島理工大学外国語学院, 2) 徳島大学教養教育院

要約：日本人との遠隔ネット交流は、外国における日本語学習者にとって、日本語会話の実践の場になる。その一方で、日本の大学生にとっては、異文化交流として、自他の文化を見直すきっかけになる。何よりのメリットは、双方の学生にとって、自学に居ながら外国の大学生と直接対話をする機会になることである。グローバル化する社会において、これに対応できる人材育成の必要性が高まっている。このような形式の授業は、限られた予算の中で、双方の学生にグローバルな視点を持たせるきっかけとして、双方の大学に有用であると考えられる。

(キーワード：遠隔ネット交流, 異文化交流, 外国語教育)

International Cooperative Lecture using Bilateral Communication ——A Trial of Distance Communication using the Internet between Quindao Technical University and Tokushima University ——

Zhang Jing¹⁾, Liu Jie¹⁾ and Makoto Ohashi²⁾¹⁾Foreign Language Department, Qingdao University of Technology,²⁾Institute of Integrated Arts and Sciences, Tokushima University

Distance communication in Japanese is a good opportunity for learners of the Japanese language, who live in foreign countries, to practice Japanese conversation. Moreover, it acts as a means of reflection on their own culture as well as foreign cultures. This style of lecture offers the opportunity for students to directly communicate with foreign students from their home universities. This innovation in university education will play a key role in fostering students who can work actively in the global society. This style of lecture seems to be useful to set up a global point of view for both groups of university students within the limited budget of both universities.

(Keywords: Distance Communication using the Internet, Cross-cultural Communication, Foreign Language Education)

1. 緒言

中国での日本語学習者として、話し方の技術面での最大な問題は、発声や発音が悪いことだと思われる¹⁾。これを解決するためのひとつの方法は、日本人とのコミュニケーションの機会を増やしていくことが必要である。しかし、そのようなことが可能であるかどうかは学習者の生活環境に依存する。国際交流の機会を設けて、日本語でのコミュニケーションの機会とすることや、インターネットの活用などを含めて、今後は日本語教育の充実のために、発声や発音を訓練する環境を提供するべきだと考えられる。

最近では情報通信ネットワークの構築が著しく進展している。特にデジタル技術の進展により、インターネットの普及、デジタル放送の開始、モバイル革命等に見られるように、情報通信ネットワークが急速に発展してきた。こうしたデジタル技術の発展に伴い、社会や経済、金融に関する様々な活動や教育活動などを情報通信ネットワーク上で行うことが、グローバルなレベルで可能となってきた²⁾。

学校教育だけではなく、生涯教育などにおいても、情報通信ネットワークを用いて、広く公開されたコンテンツも増えてきている。また、インタ

ーネット回線や専用回線を用いて双方向性を重視した学習形態の実験も行われている。遠隔地の学校においても、テレビ会議システムなどを用いての遠隔教育や、他校との交流することが出来るようになってきた³⁻⁵⁾。遠隔教育や e-learning として音声や映像を遠隔地へ送ることで、教育を活用する実践の場も増えてきている。

そこで、本稿では、青島理工大学と徳島大学との間で継続的に実施している遠隔ビデオ会議システムを用いた日本語によるグループ対話型の授業実践を例として、今後のグローバル教育のあり方と課題を検証したい。

2. 取組について

2.1. 遠隔ネット交流の方法

遠隔ネット交流は、Skype™ を使用して行った。WEB カメラは、ロジクール社 Webcam Pro 9000 QCAM-200SX、ビデオ会議用スピーカはサンワサプライ社製のものを使用した。原則として週に 1 回 (50 分間) 実施した。

2.2. 遠隔ネット交流の実施

遠隔ネット交流は、表 1 のような実施体制の下で a-c の手順でおこなった。

a. テーマの決定

中国側において、3-4 名のグループを形成し、グループ内で遠隔ビデオ会議のテーマを決定した。各グループにおいて、学生達は、あらかじめ自発的にテーマに関する情報や知識、及び関連する単語などの予習をおこなった。

b. 遠隔ビデオ会議の準備

毎週の遠隔ビデオ会議のテーマをあらかじめ、日本側に提示した。日本では、毎週の授業 90 分の前半 40 分間を用いて、前回の遠隔ネット交流の反省と中国側から提示されたテーマについて、グループ内で交流の流れを話し合う時間を設けた。

c. 遠隔ビデオ会議

中国側: 交流に参加した学生は、一回あたり 3-5

人程度であったが、オブザーバーとして、交流に参加していない学生も見学できるように配慮した。また交流後には、参加した学生達が、交流により習得した内容を整理して、これをクラスで発表した。これにより、交流に参加していない学生達にも、交流による知識を共有することができた。

日本側: 授業の後半 50 分間を用いて、遠隔ネット交流をおこなった。交流に参加した学生は、一回あたり 3-6 人程度であった。大学の正規の授業時間 (教養教育グローバル教育科目: グローバルコミュニケーションプロジェクト, グローバル化社会と異文化コミュニケーション) において実施した。これは平成 20 年度より実施している社会人と学生による共創型学習⁷⁾ 科目から発展したものであり、これをミニレポートにまとめて、交流に参加していない学生にも共有できる形式とした。また、必要に応じてオブザーバーが参加出来る形式でおこなった。

2.3. 取組についてのアンケート調査

今回の取組に参加した学生 (青島理工大学外国語学院日本語学科 3 年生 79 人, 徳島大学総合科学部 8 名, 薬学部 5 名, 理工学部 2 名, 全て 1 年生, 合計 15 人) に対して実施した。日本側の学生は、全員 2 回参加し、交流時間は、総計 100 分である。中国側の学生は、30 名が 1 回参加し、残りはオブザーバーとしての参加である。アンケートの質問項目は、次のようである。質問 b, c, d は、選択式、他は記述式とした。

a. 外国人と交流することは、自分の語学力を高めることができますか

b. 外国人との交流方法について、どのような方法が効果的だと思いますか。

b-1. オンラインのテレビ会議 b-2. LINE Facebook など b-3. 本人と向き合う交流

c. 貴校と青島理工大学との遠隔交流の授業には、どのような魅力があるかと考えていますか。

c-1. 自由な発言 c-2. 気楽な雰囲気

c-3. 皆の関心事を中心として展開できる形式

c-4. 中国に対してのイメージを深めること

d. 中国人の学生と交流において、どのような話題に興味を持っていますか。

- d-1. 日本の文学
- d-2. 日本の伝統文化
- d-3. 中国の伝統文化
- d-4. 日常生活
- d-5. テレビ番組, 映画, アイドル
- d-6. ファッション
- d-7. 有名な観光地
- d-8. 料理
- d-9. その他

e. このネット教室を継続することについて、どう思いますか。

f. 青島理工大学と徳島大学の学生との交流を一層深めるために、どんな方法が良いと思いますか

g. この遠隔交流プログラムについて、自由に意見を書いて下さい。

3. 結果と考察

3.1. 遠隔ネット交流の効果

この取組の問題点を把握して、今後の交流活動の改善につなげるために、今回の取組に参加した学生に対してアンケート調査を行った。回収率は、中国側、日本側共に 100%であった。

表 1. 日中の遠隔ネット交流の実施体制

	日本側	中国側
実施場所	徳島大学教養教育院	青島理工大学日本語学習センター
参加人員	グローバル教育科目(共創型学習科目)を受講している学生, 交換留学生, 社会人, 高校生など	青島理工大学日本語専攻の3年生
毎回の参加者	2-5人	3-5人
学習者のレベル	日本語母語者	日本語能力試験2級程度
学習者の目的	異文化交流	日本語による会話能力向上
学習者の成果	異文化に対する気づき 自国の文化の再確認	日本語会話実践による学習意欲向上



図 1. 遠隔ネット交流の実例 A. 青島理工大学での大人数オブザーバー参加型, B. 青島理工大学での小人数オブザーバー参加型, C. 徳島大学でのオブザーバー参加型, D. 徳島大学での少人数交流

青島理工大の参加者 79 名には、N1 (日本語能力試験 1 級) 26 名、N2 (同 2 級) 6 名が含まれている。日本語能力が N1 に達した学生であっても、自分の日本語の話す力や聞く力についての自己評価において、上手であると回答した学生は 16%に過ぎないことがわかった。実際に、N1 を取得している学生から、日本に行ったときに日本人との会話で不自由な思いをした経験談を聞くことが多い。これに対して、日本に在住している外国人の中には、N1 を取得していないのにも関わらず、日本語の会話力の高い人も多い。この原因として、中国で N1 を取得した学生でも、日本語の日常会話に馴れていないことが挙げられる。また、日常会話は、その地域における文化的な影響を受けて、変化をしている。地域文化は、地域によっても異なっているが、一般的な会話において、影響を及ぼしている地域の文化的背景を理解しておく必要がある。また、世代の違いや、学校、職場などのそれぞれの環境に応じて、使われている日常会話に違いがある。今回の取組のような遠隔ネット交流では、海外で生活をすることなく、簡単に海外の同世代の学生と交流することが出来る。そのために、地域の文化的な背景を気軽に感じ取ることが出来る。

特に日本の学生は、海外の学生との交流の機会が少なく、会話の相手に応じて言葉遣いを変えるなどの会話のトレーニングを受けた経験がほとんどない。そのために、彼らが日常会話で使っている表現や言葉使いを、この遠隔ネット交流においても使用することが多い。このような教科書的ではない会話表現を体験することにより、地域性のある日常会話の特色を感じ取る機会になると考えられる。遠隔ネット交流のような実践的な会話を繰り返して行くことにより、日本語の会話における聞く力、話す力は、共に向上していくと考えられる。

実際に、今回のアンケート調査の結果においても、取組に参加した 99%の学生は、今回の遠隔ネット交流は言語学習に役を果たしたと回答している。このように、遠隔ネット交流は言語学習において有用であり、このような取組をさらに発展させる必要があろう。

3.2. 遠隔ネット交流による魅力

表 2 交流のテーマの例 (2016-2017 年)

日中の芸能
日中の飲食
故郷のお土産
中日の観光地
日中の節日
旅行
中日大学生の余暇
日本の猫
中国の少数民族
日常生活
日本人の話し方
アルバイト
授業と休暇
料理
ネットショッピング
アニメ
旅游
伝統的な祝日
伝統的な料理

遠隔ネット交流による外国語学習の効果に関しては、今回のアンケート調査の結果からも明らかであろう。遠隔ネット交流による遠隔教育は、どのような魅力があるかという質問に対しては、半数近い青島理工大学学生が外国語のレベル向上を挙げている。自身の会話力が向上したという意識が、この取組の魅力として認識されたと考えられる。

アンケートの「遠隔交流の授業には、どのような魅力があるか」という質問に対して、「気楽な雰囲気」という回答が、全体の約 1/4 にも達していた。これは、教室における対面型授業に比較して、同世代の学生同士の会話であり、話題の選定や会話の進行も学生自身に任された形になっていることが影響していると考えられる。徳島大学の学生にとっては、今回の取組は日本語による会話であるために、自身の外国語学習に対する直接的な効果よりも、同世代の外国人の日本語学習の一環としての取組に参加することにより、自身の外国語

学習に対するモチベーションにつながる可能生がある。

徳島大学の学生においても遠隔ネット交流の魅力として、気楽な雰囲気という回答が、全体の、約 2/3 に達していた。これは、教室における対面型授業に比較して、同世代の学生同士の会話であり、話題の選定や会話の進行も学生自身に任せられた形になっていることが影響していると考えられる。徳島大学の学生にとっては、今回の取組は日本語による会話であるために、自身の外国語学習に対する直接的な効果よりも、同世代の外国人の日本語学習の一環としての取組に参加することに

より、自身の外国語学習に対するモチベーションにつながる可能生がある。また、中国のイメージを深めることにつながったと回答した学生も、1/3 近くに達している。中国で学ぶ学生とリアルタイムに会話をしながら、中国の文化に関する様々な情報を聞き出すことにより、これまで自身の中に抱いていた中国のイメージを一新することにつながった可能生がある。このように、取組に参加した青島理工大学と徳島大学の双方の学生が、お互いに自由に対話することにより、通常の授業での学習環境とは異なった、自由な学習環境を作り上げたということが言えよう。

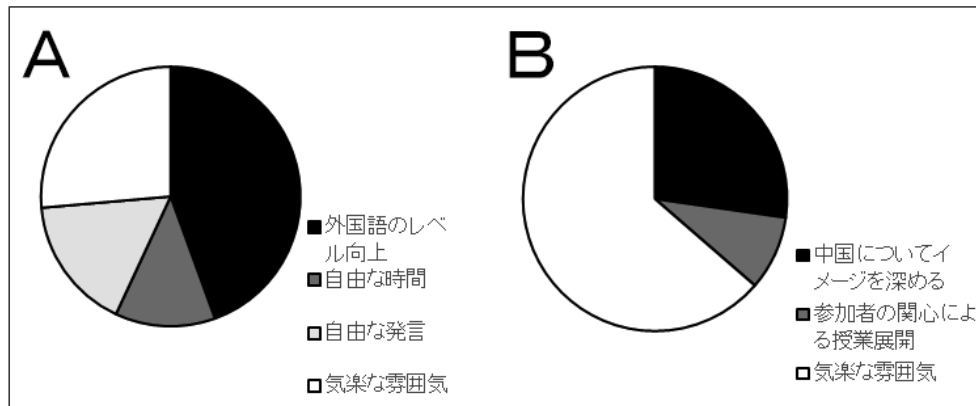


図 2. 遠隔ネット交流

「従来型の対面授業に比べて、遠隔ネット交流による遠隔教育はどんな魅力が持っていますか」という質問に対する学生の回答の割合 A. 青島理工大学の学生, B. 徳島大学の学生

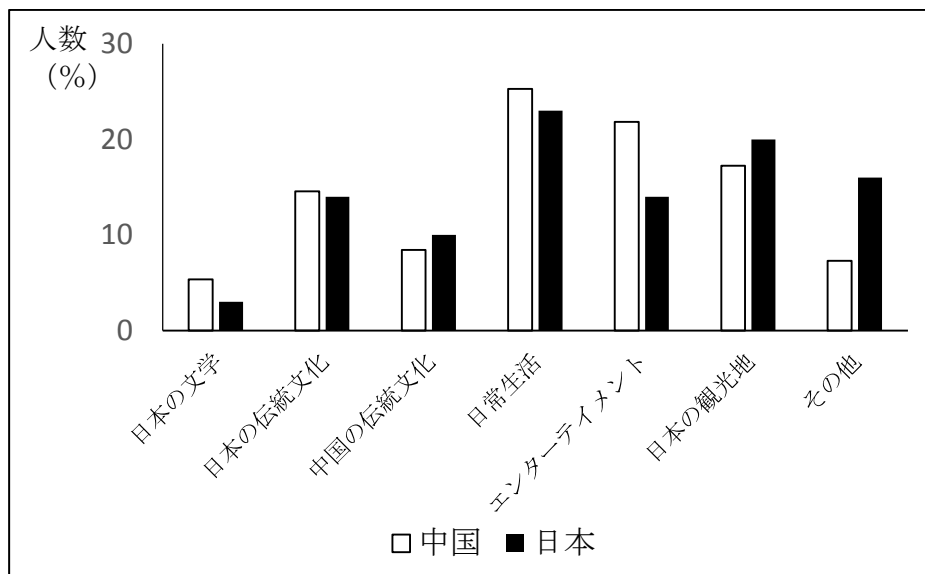


図 3. 遠隔ネット交流において興味のあるテーマ (□ 青島理工大学の学生, ■ 徳島大学の学生)

3.3. 遠隔ネット交流のテーマ設定

この遠隔ネット交流における興味のあるテーマについては、日常生活、エンターテインメント、日本の観光地を挙げる学生が多かった (図 3)。これに関しては、中国と日本の学生は、ほぼ同じ傾向を示した。この原因として、これらのテーマでは双方の学生に共通した知識があったために、話の展開がスムーズであったことが考えられる。遠隔ネット交流の運営は、双方共に学生が行っているために、気楽な雰囲気、自由な雰囲気が生まれ、国境の隔たりを感じさせないような双方の学生による日常会話の場を構築できたと考えられる。このように、学生の自主学習の場として、遠隔ネット交流を発展させるためには、テーマの設定が重要であると考えられる³⁾。このような、遠隔ネット交流を新しい形式の授業として発展させて行くためには、お互いに学ぶ意義のあるテーマを設定して、これに関する予習をして交流することや、事後学習の機会を設けるなどの工夫が必要であろう³⁾。また、将来の留学に関する相手国の情報収集などを、参加者がお互いに共有しながら進めることにより、留学に対するモチベーションを相乗的に高める効果も期待できる。留学に興味のある遠隔ネット交流の参加者同士であれば、このような目的を絞ったテーマ設定も有意義であろう。実際の留学には、費用や時間の問題があり、実現に至らない場合でも、このようなネット遠隔授業を体系化することにより、留学に近い体

験をする学習の場を提供できる可能生もある。

3.4. 改善すべき点

青島理工大学の学生が、アンケートの自由記述として記した「この取組の改善すべき点」の主要なものを図 4 にまとめた。また、具体的な意見としては、つぎのようなものがあげられる。

<媒体の映像・音声について>

- ・映像は見やすいが、音声は少し聞き取りにくい。
- ・ネットのスピードが遅い。
- ・ネットなどの施設のアクセスは悪く、毎回の交流において、時間の無駄があった。
- ・媒体施設の品質を高めて欲しい。現在の設備においては、準備として、事前に遠隔会場との通信環境の設定が必要である。遠隔地間の遠隔教育を行う場合、ネットワーク配線、ファイアウォール、ゲートウェイなどのネットワーク関連の整備改善が必要である。(多数の学生の感想)

<遠隔授業方式について>

- ・興味事を多くの人と一緒に討論、交流できるというような形式が良い。
- ・オープンな形式が好きである。
- ・参加するメンバーを増加してほしい。
- ・気楽な雰囲気に楽しんでいる。

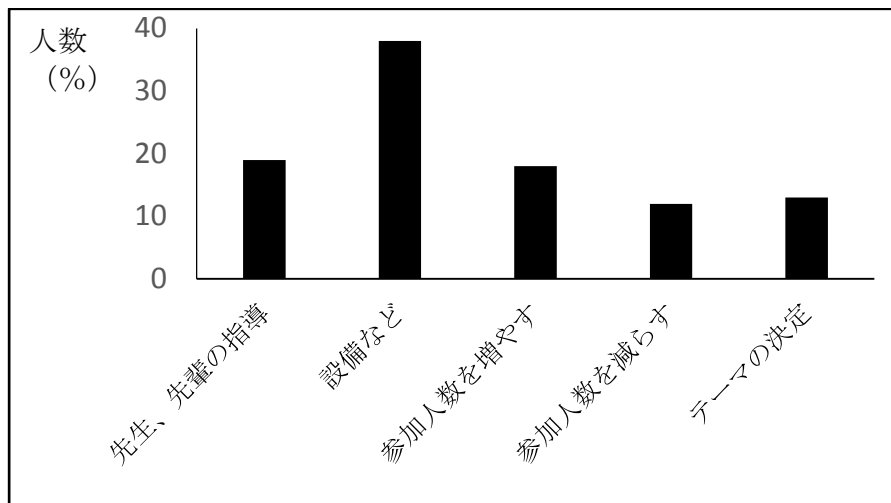


図 4. 青島理工大学の参加学生から指摘された、この取組の改善すべき点

- ・大学がこのようなネットクラスを提供してくれたことは、ありがたいと思う。このような機会は、貴重であるが、やはり対面の交流に比べると、距離感を感じやすい。従って、外国の大学を直接訪問して、対面の交流をしたい。(多数の学生の感想)
- ・臨機応変に対応する能力が上がった。
- ・外国人の友達を作ることができた。

<遠隔授業内容について>

- ・日本語の話す力や聞く力を訓練でき、このような遠隔授業をより多く実施できるように期待する。
- ・全員にチャンスを与えて、全員が発言できることを保障してほしい。
- ・わかりにくい内容を日本語と中国語も上手な人に通訳してもらい、双方の交流を促進してほしい。学生達だけでは、問題が生じた時に、うまく解決できないことがある。学習効果と勉学の質に影響を与えるし、また学習の中断を引き起こす。
- ・日本人の話し方が分かってきた。日本人と交流する時、自信がついてきたようになった。
- ・各方面の知識は豊かになった。
- ・参加するメンバーが事前に交流テーマを真面目に準備しておくべきである。
- ・授業を系統化して、正式の授業に発展させる必要がある。
- ・交流回数や時間を延長して欲しい。
- ・日本語を勉強する情熱が燃え上がった。

<交流のメンバーについて>

- ・徳島大学からのボランティアが増え、特に中国語専攻の学生が来て欲しい。
- ・わかりにくい内容を日本語と中国語も上手な人に通訳してもらい、双方の交流を促進する。出来たら、交流の時に、先生や先輩がそばにいて欲しい。
- ・学生だけではなく、社会人も参加することは、素晴らしい。

また、この取組に参加した徳島大学の学生からは、同世代の大学生との交流を通じて中国の文化を知ることができる機会であり、さらに交流を続けたいという希望が多いことが判った(表3)。

3.5. 遠隔ネット教室の意義

アンケート調査の結果から見れば、この遠隔ネット交流により、言語運用能力の向上や、自他文化の知識、異文化への理解が深まったという回答が多く見られた。こうした力を継続的につけていくことが、今後のグローバル社会において、異文化の他者と共に生きる力につながると考えられる。

今後は、学校の教育環境が、遠隔教育機能を活用した教育実践が広がることにより、教育機会の多様化や学習機会の多様化が進むと考えられる³⁻⁵⁾。今回の取組に関するアンケート調査の結果においても、学生達はこの遠隔ネット交流には大きな希望を抱えている。そして両大学間の交流の取組をさらに増やしてもらいたいという希望があることが分かった。

また、今後の改善点としては、教室整備の改善が最も多かった。これについては、ビデオ会議専用機器の導入が考えられるが、予算的な問題がある。交流時間を延長することや、発表テーマの自由を確保するという問題などは、今後検討する余地がある。今回の取組に参加した中国側の学生は「内容が簡単すぎて、よく自分の考えが表せない」「皆の前で日本語を話すのが恥ずかしい」「Skypeを通じて話す際に、周りの人の声が気になって大変緊張した」というような意見もあった。今後はこのような課題を解決するためには、様々な工夫が必要であろう。あらかじめ準備を整えて遠隔授業に臨めば、交流時間を最大限に活用でき、互いに自分の意見を建設的に述べ合ったり、積極的に質問をし合ったりする良い機会となると考えられる。

遠隔ネット交流の取組を、継続的に発展させることにより、大学間交流を推進し連携を強めることに繋がる³⁾。自国に滞在しながら、海外の大学生と国際交流をおこなうことにより、学生の国際感覚の育成にも貢献できる。さらに、この遠隔ネット交流に参加した学生が、短期間に限定して相手校を訪問することにより、国際共同授業を実現することが出来る(図5)。この相互訪問は、お互いの成果を確認しながら、将来の交流についての意見交換をおこなう機会にもなり得る。このように遠隔ネット交流では実現できなかった直接対

面による体験学習により、多くの学生が感動を共有しながら、新たな学びに対するモチベーションを与える場として機能することが期待される。

3.6. 遠隔ネット教室によるチームビルディング

筆者(張)は3年生の時、毎週このネット教室の交流活動に参加していた。この取組により、多くの体験が出来たことにより、知らず知らずに日本語の基礎知識と日本の風土習慣を把握しただけではなく、異文化交流の能力と理解力を高めることが出来ると思われる。交流の対象者は、年齢が近く同世代なので、お互いに何にも好奇心があり、たとえ小さな話題でも話が弾むことがある。相手に自分の話を理解してもらうために、真面目に事前準備をおこなった。例えば、私のグループでは事前にテーマについての単語を調べておき、コミュニケーション中で分からない言葉をノートに記録した。そして、交流後これらの点を復習して、次の日本語の授業で交流の成果を発表した。今回の取組のようなグループ学習においては、様々な工夫が可能である。このように、学習者のレベルの違いに対応できるような教育体制を、今後さらに拡大していく必要がある。

受講生にとって、限られた費用と時間に柔軟に対応出来る遠隔教育は、有望な教育方法であると考えられる³⁻⁵⁾。しかしながら、受講生が希望しないのに遠隔教育を強制するような形で実施されれば、逆効果になる可能性もあろう。従って、学生が授業を自由に選べる系統的な遠隔教育を導入すべきである。このよう一連のプロセスは、グループ学習において非常に有意義だと考えられる。なぜなら、グループ内でこのような手分けして助けあうことにより、チームワークに関する能力を高めることが出来るからである。

チーム学習の課題としては、同じグループ内にも学生の日本語能力の差があり、いつも他人の足を引っ張る学生が存在することがある。グループ学習において、周囲の環境に刺激を受け、自ら恥ずかしいと思いをしなくて済むように、自主的に努力するというモチベーションを持つことが出来ると考えられる。

3.7. 能動的な学びに向けて

今回の取組のようなグループ学習は、従来型の受身型の学習方法より、遥かに学習効果が明確である。学習者は受け身で学ぶのではなく、教師対学習者、そして学習者対学習者という能動的な学びとなり、これにより双方向性のあるコミュニケーションが促進できよう。今後は、同じチームの学習者同士のコミュニケーションを図るなど、交流に先立ったチーム作りの必要があると考えられる。

日本語教育は、中国において、ますます注目されてきている。今後は、重要性が低くなることはなく、むしろ日本語を初級から学ぼうとする留学生が増えると予測されている。そのために、幅広い層の学習者に対応できるような教育の実施体制の充実が必要となろう。また、サマースクールのような短い期間で、言語と文化を学ぶ“お試し留学”のようなニーズが世界的に高まっており、これに対しては、大学が専門的な語学教育機関を設置しなければ応えられない。また言語だけでなく、地域文化や社会に関する授業は、体験型学習を含めて、充実したプログラムのために必要である。

今回の取組である、青島理工大学と徳島大学の共同構築のネット教室コースウェアでは、特に、海外において自律的に学ぶことが困難だといわれる「話す」に焦点を当てた。母語の影響を受けたイントネーションの問題¹⁾などを克服するために、遠隔ネット交流において、「話す」機会をできるだけ多く設け、コミュニケーション能力の養成を目指している。また、学習者と教師だけではなく、学習者と学習者の相互学習を促すことにも配慮した。学習者にとって、同じ学習項目に取り組む他者の姿を見ることは、種々の気づきや動機づけを高め、学習を継続させる有意義な活動になると考えられる。学習者が受動的に学ぶという態度ではなく、教師対学習者、そして学習者対学習者という対等な立場に立つことにより、能動的で、双方向性のあるコミュニケーションが促進できると考えられる。

表 3. 遠隔ネット交流に参加した徳島大学学生の感想 (一部抜粋)

<p>今回の授業では、久しぶりの Skype を行った。今回のテーマは、食についてであった。まず、青島理工大学の学生さんが中国の正月に食べる料理を紹介してくれた。これが、最も強い印象をうけた。やはり、Skype は毎回新しいことを知ることができ、視野が広がるので私はとても好きだ (総合科学部 1 年)。</p>
<p>アニメやマンガの話をしていて一番勉強になったのは、作品のタイトルが日本と中国で表記が違うことだ。日本と違い、中国は作品の物語の内容を要約したタイトルが付くそう。そして、日本で英語をカタカナにするみたいに英語からタイトルはあまり取らないそう。中国での日本のアニメや漫画の話の話を聞けてとても面白かったのでまた Skype で色々な話をしたい (総合科学部 1 年)。</p>
<p>日本語を勉強するようになったきっかけを聞くと、歌舞伎に興味があるからと言っていました。私は日本人なのに歌舞伎についてあまりよく知らないの、もっと日本のことをよく知らなければならぬと思いました。青島理工大学の方からたくさん質問して頂いたので、次に機会があったら、私たちからもっと質問をしたいと思います (総合科学部 1 年)。</p>
<p>私は今回、青島理工大学の人と、Skype を通して交流した。そして、「日本人の話し方」というテーマで意見を交流した。最も印象に残っているのは、青島理工大学の方が、「日本人はひそひそ話をすることが多い」と言っていたことである。中国ではひそひそ話をすることはほとんどないらしく、それにとっても驚くとともに文化の違いを感じた。今回の交流を通して、国際交流をすることは文化や考え方の違いなどについて知ることができる貴重な機会であるとわかった (薬学部 1 年)。</p>
<p>理工大の学生さんは日本について学んでいるということもあって思った以上に日本のことについて詳しくかったです。好きな作家の話になったときに村上春樹さんの名前が出たことには本当に驚きました。しかし、私たちは中国について熱心に学んでいるわけではなかったの、あまり向こうの方が聞きたいと思うようなことに答えられなかったのがとても残念に思いました (薬学部 1 年)。</p>



図 5. 徳島大学の学生が、青島理工大学に訪問して、実施した国際共同授業

3.8. 大学の国際化

現代社会においては、情報通信技術 (ICT) や交通手段の進歩により、歴史上かつてないスピードと規模で、人・モノ・カネ・情報が国境を越えて移動するグローバル化の時代を迎えている。東アジアの多くの国々においても、経済成長と共に、高等教育が急速に発展・拡大している。このような状況のもとで、大学においても国際化を推進する動きが広まってきている。

このようなグローバル化の動きは、高等教育にも大きな影響を与えている。通信技術の発達により、世界中の大学を結ぶ巨大な学術ネットワークが構築され、教育研究における国際的な競争と協働が同時に起こっている。また、各国のトップクラスの大学は、グローバル化への対応と世界的な大競争を念頭においた中長期の戦略を持つようになってきている。そのような大学においては、国際化は中心的な戦略的課題として取り上げられている。このような潮流において、大学間のネットワーク構築と教育・学生交流の促進、そしてグローバル人材の育成が国際化の中心的な課題であることに変わりはない⁶⁾。しかしながら、それ以上にグローバルな知識社会のデマンドに応えられるような形に、大学の変革を促す触媒の役割を、国際化という動きが担っている時代にさしかかっていると言えよう。次世代育成のための知の循環型社会⁷⁾をグローバルに展開するために、今回の取組のような、遠隔ネット交流のような形式の授業を充実させていく必要があると考えられる。

注

本論文のアンケート調査は 2017 年中国青島理工大学における創新科術プログラム (メンバー: 張晶, 楊瑞雪, 杜阿嬌, 歐陽碩一, 卞毛寧) による成果である。

参考文献

1) 朱春躍「中国語話者の日本語アクセントの習得—その特徴と指導上の問題点をめぐって」『国際化する日本語 - 話し言葉の科学と音声教育』第 7 回「大学と科学」公開シンポジウム

- 組織委員会(編) 東京:クバプロ pp.179-184, 1993
- 2) 福田彩, 教育を通しての平和構築—遠隔教育による視点の多様化の育成. 教育研究 56:189-194, 2014
- 3) 鄭 愛軍・大橋 眞, 実例による異文化コミュニケーションの問題分析-青島理工大学と徳島大学とのインターネット交流を中心に- 大学教育研究ジャーナル 8:69-75, 2011
- 4) 大塚薫・王勇萍, 日中两大学間協働日本語遠隔授業の構築. 高知大学留学生教育 *Journal of international student education* 7:65-81, 2013
- 5) 岩崎浩与司, 異文化能力の育成をめざした遠隔日本語教育. 日本語教育方法研究会誌 22:42-43, 2015
- 6) 大橋 眞・胡 萌萌・入口幸子・間賀田 悠吾・齊藤 隆仁, グローバル化社会に向けた大学教養教育とは 大学教育研究ジャーナル 11:117-124, 2014
- 7) 大橋 眞・中恵 真理子・光永 雅子・Fukuda Steve T.・齊藤 隆仁・菊池 誠・香川 順子・廣渡 修一, 大学教育改革と教養教育:地域社会人活用による知の循環型社会構築に向けて 大学教育研究ジャーナル 6:58-69, 2009